奴小万一代記 (合六冊) 八

ヘ
183
8

ヘ13
187
8

小本
187
8

後篇奴小万物語　八之巻

されバところへ。悪船の忠右衛門飛がごとくに走きたり。
二人が袖をしかととらへ。わかれん五郎八声をひくし
くるし。喪をなちて殺してしまひ。とさとし袖をかき
らんとなせしに。忠右衛門声かけて。此二方は時溺死
いたせしつもりなし。此忠臣にて詳の事を知り侍らずが思ひ
うひおひしとあり。此あく人ハ姉弟にてハあらじばつと
いふに。二人うち驚き。それ何等縁在るやとたづぬる
ある忠右衛門まづしばしをやすんじ　いひいでけるハ
我ハなやまれけり。ぐち人を世話なせしことハ

たゞ恩あるもちんなれもおのづきさまにもてなれ
と。遊狭のなかにひなれば。恩あり。因あればこそかく
もんをつけるなりんと。君ここちに。心のそこいんまうされんと
我男をこゝかくこゝちにのくゝつらひて。かゝる珍事を
ひきおこぶまをわが種性を君さちに語りかりせ
し故なれば。是一生のあやまりと殺されば二十年也
かし。われ十二三才のころ秋田城之助宗景の茶道小僧
にてありけるが。一日五郎八主の父ご安濃四郎殿に
宗景公密語ありて。側の人をとほざけ給ふ。只

おさなき心に何のわきまへもなく。彼密談をきゝおほえし
う。次の間にわづかまりねて仔細をきゝけだ。宗景公の
側女唐衣とよぶ女安濃四郎どのに懸想なしけれど
艶書をよせられけるを。宗景公の御耳にいり遂に
手討にもなるべきところ。彼女懐孕してはや五月
といふなれば。子の愛にひかされ給ひ。御手討をお
ぼしめしとゞまらせられ。夫故なく安濃四郎どの
彼唐衣をたまはるべき密談也。そのおり我あや
まちして障子のあきをひびかせければ。宗景公人

あるを知りて大ひに怒り給ひ。既に命もめさるべき
結構なるを安野次郎どのさまざまに主君にいひ和
め。其場より我をつれ帰り。多くの金子まであたへ
くれぬ。されどなほ鎌倉を立退き。今この難波に
て人も知りたる。侠客となりたるも。これ又安野
殿の仁心故なり。それより彼女は安野次郎殿の
室となり。一人の女子をもうけたれども。是則これなる
小まん女郎也。安野次郎じつの実子と披露せ
ざれバいふでもなければ。宗景公の御胤なるぞ

あくされど此一事を知るものは。我の外はなかりけり
又五良八主なれば。安野次郎殿の側女。横雲どのの
実子なれば。因あるにはにたれども。元より他人に
て。夫婦となりぬるも苦しかるべからず。往年
宗景公は謀叛の罪は何れも鎌倉へ申しひらき
再生父母なる安野次郎どのを。いふもして継母
のこゝろ持仕せんと。心をくだきし甲斐もなくやや
御切腹とは。悲歎をなさるべし。せめてもの
とがん被じと。今も横雲殿の行方を尋ねしが

小万
坂東彦三郎

唐衣殿ハ賊魁となりて。悪行募りしと風説の
なく実否を知らず。千葉横雲殿のゆるし の圖
にかくれそこなふを。幸じて吹了し世話やしも
此縁なり。先年横雲殿の内月宮の初て
ゆまん主にあひまりしや。かりや宗景公の電女に
いあらずやと。御身の母ごなる。唐きぬといひたまも
じやと問われど。其時奥州へおくれと答かへしは
か衣殿の。悪行をもちあひてならんと。其心ろ
の底をこたるまく謀りに。小まんは兵然なりと

いふのことへ。されどなほ心中に忠太衛門が言葉をとらぶ
かるありさまなりしかば。忠太衛門側を信ぜられて。天
満宮の鳥居のもとなる。石盤の水を木盃にう
つし。二人が手中にさしてのひるに。水中へ
親子兄弟の鮮血をそゝぎて入るゝに相和
まるをなべく人の知るところ。わが玄蕃の言
あつまるをこゝろみへとおしゆれば。二人は実も
こおもひ。指をさきて水中へ血汐を流せど。相和
まる事なりければ。互にうたがひをなし溺死を

むと思ひとまりけり。かゝる処へちんじものゝ喜斎も
たづね来り。忠右衛門が両人の情死をとゞめける段
きゝて。大によろこび。我家長にさきだちて。ちしり
生しが。親々のとしごろめぐり。徒に時をうつ
せり。まづ兎も角も家にかへりて後。支度儀し
あへしと。忠右衛門も二人を伴ひて堂島に入
至りけり。其のち小まんをば喜斎が妹となし揺
を授く。小まん五良八が仮の因をむすびしかば
小まんを五良八が許へ嫁せしめ。家名も生国を

れば鎌倉屋とよび。茶商人となりしとぞ。家業へ
ゆたかなりし。一男一女をもうけ

㊅ 女僧と成て長寿を保つ

ことども知らいく年月をへて。小まんは今や四十
になりける。一子五郎八に対面しける所。妻二十年
余り君にそひかしく。既にのぞみは満に似て
いまだに嵩ひずるを二ツあり。稀なりし君
別に侘室をかまひて。妻にも子をよびあへと
うち泣ければ。五郎八おどろき。それのみ

仔細ありや偕老同穴にいらんと誓ひしも。若木
の花むなしとなり。はかなき紅老木にのこを
くるをきこゆる心も隔ねとひかれは。かまん
きをやつれ答けるは。君にもきかし郷をせかすご
とく。妾が母なる哀を言る市数右衛門とは浪士
に討れぬと。往年小山の九助が捕縛りかせ告し
りど。彼数右衛門が在所も知れぬ。其うへ又仇人を
いふされば。めぐりあはんもはかなきもせんすべなし。是
憂の一つなり。又我ならしの生石濱なる浄観寺の

偕果常は。ワけわを金百両に贖ひける傾の主な
れど彼が目をかすめて。君と私情をつうじあまさへ
振袖をきらちらかし刀あまりて肩さきへ切こゝさ
るれ。主も色もおもひ大罪なり。此二つのおれひ絶
に吟じ。月に幾くどをなきをいかにとなす。
愛子ナ二人をりふけしくは。尼法師ともさまなへ
母なる哀。恩ある果団がなきいふもの。ぜひなく心
きかなりと涙ながらに物語れは。五郎八もも
らいと涙をおとし。修羅帰母に似気なく

勇あるのみにあらばこそ孝行報恩の志ある
こそ。花実そなはりし。貞婦といふべく。賞せる
に余りあり。百年そふともあくまでと二人の
稚子あれば。かの時の別れ忍びてしばしされどせつなる
ちぎりしを感じ。此身の心にまかせて下とひけ
れば。かまんのものに悦び。同国住吉郡はちま寺の住
僧。秀海和尚といへるは。大徳のきこえありけ
れば。彼和尚を師となのみ。心づくしも二八の子
を髪そりのこし。鳥羽玉の夜にあるつきふるでし

黒髪をおしけなくも切おとし。名を松栄とよび
常に世の若をうとんじて涙にむせび。六根を
きよめて法華を読誦しつゝちいさき庵にひ
きこもり。念仏より外他事なかりけり。かくて一日
松栄律なる寺に詣でけるおり。秀海和尚一心
不乱に念じみしておはしけるを。遠く参られ
ば。一ツの証拠と。女の振袖なり。添りてよくされば
往年浄観寺にてきつりなりしに。着用の袖にまよひ
なし。大におどろき忙なし。縁れ其もとふに。秀海

荒寺とうち忘え。此あたり袖之比砺波となる。ともに
一條のすのがたりあるもふかひくしせ武さし出玉杖
をひきてつる剣。石浪といふところを過り日もを
や釣かあれバとあるかなちに一夜をあかす。旅
おりひ。経文徐に誦しかしこに歩をとゞめんとす
すを。里人おしとゞめていへく。旅僧にいふ。セ
ぬりどや。あれなる浄観ちといふ荒あれむり果
寺といふ住僧。雨風のたけし此夜。何等由縁
にや。愛童にまよひされし。が。執念のきづなしくち

がくて死もやらず活もやらず。鬼となりなりといひつ
たへ人もおそろしげに通ひ得ざりし。旅僧よも浄観
寺の行方をいとゞまよひて。隅田のほとりに分かりと宿
をもとめつゝ。ねもごろにおしへける。かの里人
が志を感じ。たちかへる折りしもて路をちがへたる
の荒れすさみたれバ。精舎ならんで野らとなり。柱は
斜にかたぶき瓦ハ十分が一をとゞめ。軒なる月に照し
これぞ本堂にいたりて。狐狼のすむかとおもふ
さしに人ありともみえず。眠蔵のいまだしく捜らんれバ

乱草のうちに一個老僧顔色憔悴し形容枯槁せ
るが黙然として女の小袖のかた袖をにぎりつゝ雲の
まよふ心と云ふをくりかへしくりかへし口のうちに吟じて蹲踞
り。彼里人が物語りし果なるとやらんハ此僧なるらんと
近よりてあゆみよれば。消たりしや紅粉翠黛は唇皮とな
りものとなる変相をしてし。男女の婬楽かたちは臭
骸を擁へしと。むきだしきたなき脂の五体に愛着とのこ
し。一大変の濫觴を仕損じたるか。愚なるまよひなりと
大声にいひわたれば。彼僧漸く唇をとぢて我は執心の

ちりかゝりたるのこゝにもあらだ。と又頭をたれち
そのこゝろのまよふたることを。と操りくりし吟ずるを先
のごとく。我偈かつがれをてせむやそのまし花のおもかげ
に耳に口をちかづけ念珠をもりつゝ頭を打れ。
彼僧目を見ひらき

もてせむやそのまし花の面影にたちそふ雲のまよふ心を

と吟じ莞爾と笑ふよと見えし忽ち煩悩の愛念
さらりと肉落析く。朝日にむかふ霜のごとく
四大分散し。只一連の白骨と化し。のこりしものへ

此なる袖のまくら。いく年月の雨露をしのがれども。いさく
かも色のかはらざるは。彼が執心の袖にやどりけるにや。さ
ありし女のたましひ既に成仏も一念百生繋念
を無量劫とせるなり。おそれても恐るべきは。悋
執の一念なりと語りければ。忠栄は両手をつきて泣
て詫びつゝ泣げしが。時ありて涙をおさめ。甚行
童といふは雛妻なりとおもひしに。果然我を切らせ
しは我なり。夫にむかしまで女房をさまたげしをもう
母は本衣が相州吉田橋にて。高市数太之丞

ものに討たるまで落もせずしてありければ。秀海
大いにおどろきて。此鉦鼓一條のゆかりのあること
いひしも。則其文なり。数太之丞が為る人あれば。
かくいふ秀海なりと切るなり。忠栄はおもひもかけ
ざる事をきけば。答もなさずして。秀海が顔をまもり
ゐたるのみ。秀海ふたゝびいひけるは。此鉦鼓に上総玉百
慶文郎主某と彫りつけたり。我父数太は若き時の所持
なりし此鉦鼓によりて。唐衣を我が父の仇人なりと志して
と旅店小波の金を屋が旅僧となりまゐらせ初

め。狐火に雀眼をたまけられしより。狩衣が首
子狐の咥へさりしかもうまで誘りけれども正栄ハ泣
より外にせんすべなく。少時ありて涙をおさへ。仇人
と契りても。師弟の契縁なりしあるも何の因縁
なるなりめ。いまはかゝる君とともに他人とさまはなくなる
上に恨べきもそれもあらし。をも又かくさとりあれば。
讐へ昔のをかくへわくべきりあひあつかはるともむ討
きむさまに申しし。此上ハ妾すらとも母唐衣があれあ
とを称もこゝにをかしけてさへど。露涙げさたひなく

きこえしかれが弘海も彼が孝心を感じ。かさね衍て
いひけるハ。我も唐衣を討し。生国上総の国へ立帰らく
なしが只官世の無常を観じ。墨の衣とまがく
をえ。今富も所に来りて。汝身と師弟の契縁を
せしも。前世よりのさぐるなりし因縁なるべししとぞ。父
救ひかなふとも。唐衣が菩提もとむらひける。
正栄も此津守寺の造作なりし庵をむすびて
ぞともにくらしにけれる。紅てある時月深く夜閑かく
荻の葉をさやぐる風ふりくるる。正栄一人寂寞と

として念珠をつまぐり。おもひにまどろみたる夢の中に
此世をさりし母唐衣あらはれ。姿にかたちを近くよりてとあ
ゆめによろこぶ。松葉はあまり悦びしさに涙さへ出て手を
とりかはし悲しみ泣。唐衣やあつていひけるは。我
若かりし時は女楽のうちに交れど。宗景公の側室と
その契りの妻が嫉みによるものなりし。其後こそぶれども
こころをまよはず。さまざまの悪縁のあらはしに。高楼にきたる
霊狐のたたりかくし。魂をとらるれ。我は嫉妬にしてなく
更におもひわきまへつる事なし。それよりも彼者の人

を殺しつる咎によりて。無間地獄に堕罪す。夢想
の苦患を受て。うかむ期さらになかりしところ。
苦哉汝仏りんにより。妻があとをとむらひし功力によりて
みづの罪咎消滅なし。今年都率の内院に秘密の
灌頂あるによりて。妻琴をも奏しつつ諸菩薩とともに万
壮楽をつとむ。およそ仏勅する事ならずによつて断地獄
のくげんをまぬかれ。安養浄土にかへるべきなり。ありがたきに
れ因によつてきたれる事あり。汝あやまつて果寄をとるなり。
主を討うとなげくども。是又一ッの因縁あり。彼俗性を

左衛門の尉れ図どらひしより宗景公の御謀叛のお
もむき疋松に北条殿へ讒言なしけるをあれバ己よ
りてさゝへし宗景公をとらへもおかじされバ彼果
因を殺害せし汝にそ〳〵父の仇人をうつに似て
罪なき人とハいひがたし我ハそまじの悪行のつの返
小高市松ちゝ門介の名ハ秀海に殺されつるハ天つに
かれがしわざをとらへて我罪をせあれかへしもかも恨じ
ざきをもてなく中将の意趣と師弟の因をむすびしも
宿世よりのきざしなりし因縁なるべし頓天堂に化なさるゝ

其折りかさびび対面せんと告おもむきあとなく夢ハさ
めにけり松栄なればさらばしと泣のなみく夜も暁ちかく
己れハ津守寺にておもむき秀海和尚より一五一十を
物語りよし苦巣の妄相を壓離し自己の妙理
を欣求して一念不乱にねこなひをなし百余歳の寿を
たもちける又八も長寿にして男子をもうけて鎌倉屋
の家名つがしめ女子ハ富家へ嫁せしめいとめでたく
ぞ富栄なりしとなん

後編奴の小まん八の巻終

作者　柳亭種彦

畫人　倭遊女歌川